

## 『証言でつづる日本国憲法の成立経緯』を読んで

柴田 幹雄 陸自75

筆者の父は自衛官だったが、私が小学校6年の時、教室で担任教師から自衛隊は憲法違反だといわれた。自衛隊は憲法違反なのか、というのはそのころから心に引つかかっていた。

防大では憲法の授業があった。教官は本書の著者、西修助教教授（当時）で、「9条第2項に加えられた『前項の目的を達するため』という芦田修正により、自衛戦力の保持が可能になった。憲法に自衛のための武力を保持してはいけないとは書いてない。だから自衛隊は違憲ではない」と教えられた。それを聞いて大いに安堵したことを記憶している。

本書の冒頭に、「憲法に少しでも関心のある人に読んでもらいたい」とあ

る。私は日本国憲法の正当性や第9条に関心があり、もちろん専門知識があるわけではないが大変興味深く読んで

だ。著者の西修駒澤大学名誉教授は、早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、政治学博士、法学博士で、専攻は憲法学、比較憲法学である。

本書は、憲法制定にかかわった日本人、そしてマッカーサーに命ぜられて起草に携わった米国人などに1984〜85年当時にインタビューした記録を軸に書いてある。今まで知らなかった事実が証言を通じて明らかになるのはスリリングでさえある。以下内容のごく一部だが紹介する。

外務省でGHQと頻繁に接触し、最後は駐米大使、ジュネーブ軍縮委員会日本代表を勤めた朝海浩一郎氏は「日本国憲法の成立過程で多少とも日本人の自主性が入っているという見方は完全に誤っています。詭弁です。この憲法はGHQによって下されたものです」「占領というのは生易しいものではない。なんといつても向うは、犠牲を払い、血を流し、日本を再び立つこと能わざるような国にすることを目的としていたのですから」「第9条について、幣原さんがマッカーサーとの会話などで、『非常に良いものになった』と語ったと伝えられてい

ますが、幣原さんがそういわざるを得なかったのですよ。日本人が泣く泣く受け入れた―それが日本国憲法なのです」「憲法を押し付けなければ占領軍の価値がないでしょう」と述べている。著者は、「憲法の押し付け性」を否定する議論もあるが、観念よりも体験のほうがはるかに説得的であると書いて

いる。別の証言者は、「幣原首相は、天皇の戦争責任を追及される危惧から憲法草案を受け入れるほかないと考えた。それこそが草案受諾を決断したすべてで、決して自発的意思で受け入れたのではないと言った」と述べている。

本書の後半は米国人にインタビューした内容であり、各項目の担当者に話を聞いている。戦争放棄条項は、GHQの憲法起草運営委員会の委員長ケーデイス大佐が担当である。マッカーサーの指示では自衛戦争も放棄させることだったが、それが独立国として現実的でないと考え、ケーデイス大佐が削除修正し、マッカーサーも何も言わなかったため起草作業はそのまま進んだ。「芦田修正の際、もし『国の交戦権』も言われたらすぐ削除したでしょう」とケーデイスが証言している。

芦田修正について、57年12月5日、芦田自身が内閣の憲法調査会において、以下の証言をした。「修正の字句はまことに明瞭を欠くものであります

## 証言の経緯

## 日本国憲法の成立経緯



インタビュー記事  
8人を含む、  
歴史的証人  
45人への  
インタビュー記事

本書を読んでみると、日本国憲法の正当性についてまず考えさせられた。占領下で、主権を失った日本に連合国の意思で受け入れを強要された経緯が当時の日本人の証言からよく理解でき

る。更に感じたことは、従来から憲法上軍隊は持てないので日本では自衛隊であり、憲法で言う戦力でもないといった説明が、なぜまかり通ってきたのかということである。

日本に憲法を押し付けたマッカーサー以下起草のメンバーの多くは、芦田修正の意味を認識していた。さらに日本の憲法を改正することに関する会議「第3委員会」（46年9月20日）の中国代表も「芦田修正により常識的には、日本が自衛のための軍隊を持つと読める」と発言している。そしてその認識を受けて憲法66条2項の文民条項が加えられた。なぜ日本人だけ憲法上軍隊が持てないと考えるのか。

現在安倍首相は、「憲法に自衛隊を明記する」と言っているが、筆者は、その必要はないのではないかと思う。自衛隊の地位に関する限り、芦田修正により自衛のための戦力（軍隊）を持つ以上、憲法を改正せずとも自衛隊を自衛のための軍隊、国防軍にすればよい。自衛隊などという中途半端な地位に置くことが問題で、憲法に自衛隊

と書けば、芦田修正を無視し、軍隊でない自衛隊を肯定することになり自衛隊の2重否定になりはしないか。

憲法改正論議も盛んな昨今、日本国憲法の成立過程を知ることはいかに有意義であると思う。本書は貴重な資料でもあるが、読み物としても大変興味深い。是非ご一読を。

なお、本書の出版は、海竜社（TEL 03-3542-9671）、定価2500円です。